

平田利晴 著

『萩原朔太郎の文学』を読む

佐藤 房 儀

1

本書は、萩原朔太郎の初期の短歌と、それに続く詩を晩年に至るまで論じたものである。著者の方法論は終始一貫しており、頑ななまでに作品を論証の正面に据え、一享受者としての姿勢を崩していない。その態度はまるで偉大な師の前に羽織袴で坐った弟子のように謙虚である。

著者は自己の研究態度を明確にするため、二つの「序説」で作品に向う視点の位置と論証する姿勢について述べる。まず第一に朔太郎の作品を享受する側の客観的態度の必要性を強調し、各詩作品を一個の完成した文学と見て、個別の作品を厳密に考察しなければならぬとする。著者はそこで次のように自らの立場を鮮明にしている。

享受の前提として、自らの〈状況論的判断〉による偏りを朔太郎文学との関係において相対化してゆくためには、まず、朔太郎の作品のひとつひとつがもつ〈状況〉をそれ身体としてかかんがえなければならぬだろう。

このことは著者が作品論を展開するに際して、個々の作品の独立性を強調する立場に在ることを意味している。そして

朔太郎の文学を、その〈状況〉の側からではなく、朔太郎の文学そのものの側に可能なかぎり即してかかんがえてみようというものが、本書の目的である。

と、論究の前提をはっきりさせる。この立場から著者は一篇々々の詩について考究し、さらに詩集というまとまりに於いてどのように統一した観察が導き出されるか、また詩集を編む朔太郎の立場は如何なるものであるかを探って行く。

著者は、作品を理解するために、次のような研究姿勢をとる。

いわゆる「萩原朔太郎」という人物と、個々の作品に在る「萩原朔太郎」とを、とりあえず切りはなしてかかんがえてみようとおもう。後者の「萩原朔太郎」をかりに「産出主体」と呼ぶとすれば、いわゆる「萩原朔太郎なる人物」と、個々の作品の「産出主体としての萩原朔太郎」とは、おそらく複数の人物の関係ほどにべだたった別人のはずであろう。しかも、「産出主体としての萩原朔太郎」は、作品のひとつひとつにおいて、それぞれ、その作品に特有の「産出主体としての萩原朔太郎」であるはずで、その位相は、それぞれ、微妙あるいは決定的に、ことなっているはずである。

これによると著者は、個々の詩の作者と、それを全体的に統一する作者とを分けて考えている。著者は厳密に作品の独立性を考えて、「産出主体」という耳馴れない言葉を創造した。そして、

同一人物の手になる作品を、単純に、それより以前の彼(彼女)の作品の帰結とみることもできないし、それより以後に書かれた作品の前兆としてとらえることも誤謬を含むのだ。と説く。このような著者の立論の前提を十分に理解しておかないと、本書を読み進んで行くことはできない。特に「産出主体」と言う言葉は、著者の立論の根本にあり、この意味を確実に把握しておく必要がある。

「本論」は四章に分かれ、まず初期の短歌と「愛憐詩篇」について触れ、次に『月に吠える』へ、更に『青猫』と「青猫以後」を論じ、最後に「郷土望景詩」から『水島』に至って閉じる。しかもそこでは、生活人萩原朔太郎や詩人の個性は問題とせず、あくまでも作品そのものに則して論じている。

また、著者の考察上最も興味のある点は詩型の変化にある。朔太郎は短歌を創作し、ついで「愛憐詩篇」の文語自由詩となり、それが『月に吠える』から「青猫以後」の口語自由詩に変じ、最後に再度「郷土望景詩」や『水島』の文語詩を書いた。そのように変化した原因がどこにあるのかという疑問は、著者の最大の関心事であり、本書を貫く重要な問題提起である。

2

ここで本書の内容について簡単に触れる。著者はまず朔太郎の文学上の出発となった短歌について論じ、未成熟に終わった短歌の創作を、次のように結論づける。

『萩原朔太郎の文学』を読む

彼は、短歌三十一音五七定型律との対峙角逐をしていなかった、したがってまた、その歌語もへ宣叙」域のままにおかれ、彼独自の歌語を創造するところでもとらえられなかった。このかぎり、朔太郎は、短歌定型に拒絶され、その結果、口語自由詩形を選ぶよりほかなかったのだといえるだろう。

著者は筑摩書房版『萩原朔太郎全集』で初めて採録された、朔太郎の自筆歌集『ソライロノハナ』などにも目を通し、朔太郎の短歌全般を観察しながら、短歌が成熟に至らず、必然的に詩へと移向しなければならなかった点を説き明かす。著者は短歌を叙述面から切り込んでおり、新しい方法論を展開している。短歌だけではなく詩においても、同じく作品の叙述法を分析することによって論を進めているが、この方法は独創的であり本書の論述展開の中心をなしている。

「愛憐詩篇」論では、大衆的な魅力をもつ作品が自己愛に発しており、それは前期の作品に多く見られると論じる。またそれに比べて後期の作品は芸術的完成度が高いという。しかしここで著者は前期の作を決して否定しているのではなく、甘さを認めつつも捨て難い魅力があるという意見に賛同している。

次に『月に吠える』の魅力、次のような点に認める。

《病まずありながら病んでい、病んでいながら病まずある》といった錯雑した一面を『月に吠える』のイマージュはもっており、また、産出主体自身も、そういうイマージュとのかかわり、表象の位置といったものを確定しきれず錯雑させて

いたわけである。

この考えをさらに押し進めて、『月に吠える』に「イマージュの脆弱」をみる。そして個別作品の結句を品詞分類することによって、『月に吠える』の作品が「自己充足的な幻影の吐露」であり、それによって享受者は「切実さに心をうたれる」という。この意見には大いに同感した。

著者はさらに論を進めて、

一見、日常生活者朔太郎の実生活的レベルでの心情吐露のように見える口吻を多用して、それらしく見せかける。だから、享受者が十全なかたちで詩篇のイマージュへ転移しきらなくとも、それはそれで自分の実生活的な想念と重ねあわせて享受できるのである。享受者は、いわば、詩篇のイマージュの世界と自分の実生活的レベルでの想念のはざままで『月に吠える』を享受するのだ。

と述べ、そこに『月に吠える』の魅力の秘密を見る。たしかにこの意見の通りであろうが、ここまで論を進めると何も『月に吠える』に限ったことではなく、芸術作品一般の享受についても言えるのではないか。むしろこの意見を前提とした上で、著者の言う『月に吠える』に見られる「イマージュの脆弱」へと論じて行くべきであったと思われる。

それにしても『月に吠える』論の二節、三節は、本書に於いて著者がかつとも力を入れた論考であり、著者の力量を十分に発輝した処で、それだけに書きすぎてしまった点も見られる。またこ

こでは本書全体のテーマである、

口語詩篇が、総じて、産出主体内部の世界とこれに向けられた詠嘆の詩であること、文語詩篇が、総じて、外在的な世界とこれに向けられた詠嘆の詩であること。

と言った見解を明らかにする。

『青猫』については、詩篇創作時期にみられる中断期に注目して、その時期を経ることによって一層の「表現対象領域の拡充」がなされ、その結果「青猫以後」の作品に見られる成熟がもたらされた、と説く部分に最も興味をもった。そしてこの成熟は、

自らのありようを日常現実的な視野においてとらえるという認識の幅を獲得した朔太郎が、自らの内部心象をも対他的な視野のもとに表象する表現対象領域の充実を、実作品においてみごとにはたしたことを証明する。

として、朔太郎の視野の拡がりを説明する。だがそれにより、自己の内部心象のイマージュ化をそぎおとされる性質をかかえこんでしまった。

と追論し、『月に吠える』から「青猫以後」に至るまでの口語自由詩作品に共通な、「対他的な視野を欠く」という「致命的な欠落点をもって」いるとして、「青猫以後」の成熟は「まさしく『幻の成熟』であった」と結論づける。そうは言っても、著者は「青猫以後」の作品の価値を否定している訳ではない。むしろ逆である。著者は、朔太郎の詩が内包しているものと内包しきれなかったものを明確にして、単純な賛美に終ることを避けているの

である。

「郷土望景詩」から『水島』に至る文語詩については、「自己の外側にある対象にむけて心情を吐露したものである」が、「その心情もまた外在的な世界にからめとられてしま」い、その結果文語による詩として現われたのだと論じる。そして朔太郎の詩が、あまつたれたヒロイズム、現実認識と自己認識のあまさをもっていてこそ、『月に吠える』期の自己存在の不安感や『青猫』後半期以後の口語詩系詩篇にみられる無為が、他の追隨をゆるさない稀有の詩的成熟をみせた。

と言う。この「郷土望景詩」論も非常に力が籠っていて、朔太郎にとつて『望景』ということが何んであり、作品にどのように反映されているかを詳しく論じている。

以上が大まかな内容である。

3

著者の朔太郎の詩に向う姿勢は非常に厳格であり、作品の根本問題を徹底的に論じようとする。その為に自己を客観的な立場に置き、絶えず冷静な享受者としての姿勢を失うまいとしている。著者は朔太郎の詩の魅力に囚われて立論の場を曖昧にし、賛美者として安易な主観に入り込んでしまうことを極端なまでに避ける。著者は論じる対象を詩に限定し、そこから離れぬように努めている。

だが、著者の論述の方法と文体は、あまりに厳格であろうとす

『萩原朔太郎の文学』を読む

る姿勢に呪縛され、既に引例した幾つかの文章によっても推察される如く、煩瑣で回りくどくなつてしまつた。そして文体は自己中心的な印象を与え、読者に理解を強要するかの如くである。たとえば著者は、厳密に作品に向おうとする姿勢から「産出主体」という、特殊な馴染みのない語句を創造した。この耳馴れない造語は、読み進みながらしばしば戸惑い、馴れるまで相当の時間を要した。この語句に対する読者側の努力は一応別問題としても、個々の詩を創作する立場をすべて分けようとする論法そのものに問題はありはしないか。論証する詩の作者は萩原朔太郎という人物一人であり、それ故にこそ口語詩や文語詩という風に創作時期による分類が出来、それらの創作者朔太郎の精神が考えられ、著者の「内在的な世界は口語で、外在的な世界は文語で、それぞれ形象される」と言う理論が導き出される訳である。あまりに一篇一篇の独立性に注目しすぎると、一冊の詩集を、また同一時期の作品を観察する立場に矛盾を来すことになりわしわしないか。

また「産出主体」と言う語句と同じくらしいに、「対峙角逐」とか「日常現実的」とか言う語も、同一ページに幾つとなく頻出するが、これらもどうにも理解しずらく読み難くかつた。

著者は「抒情主体」という語句も使用しているが、この同じ言葉が筆者也別な意味で使っている。初めて使つたのは昭和四十二年三月の『国文学研究』に載せた「萩原朔太郎詩研究」という小文である。小説の場合、主人公 (Hero) とか女主人公 (Heroine) とか言う言葉があるが、詩にはそのような用語はなく、詩中の

「私」とか主人公にあたるものは、みな創作者である詩人と同一であると看做されている。ところが詩も創作であり、必ずしも詩中の「私」が創作者その人とは限らない。その点西欧では Tyro Hero という言葉が用いられていると仄聞した。それを「詩中の主人公」としたのではどうも間が抜けてしまう、そこで「抒情主体」という風に造語してみたのである。本書の著者にも一考いただけたらと願っている。

再び本題に戻ると、どうみても著者の用語及び運筆の未成熟によって、文意を殊更小難しくしていると感じられる場合も、多々あったことを指摘しないでは置けない。たとえば、

言語主体も、歴史的社会的過去の帰結的総体としての實在であるが、ふだんは、それが個別的現象的な相をとる現代的状況におおわれている。そこで、言葉の二重性との角逐がないかぎり、現代的状況は普遍的な現代的現実化されないのだが、もしかりに言葉の二重性との角逐をエスケープしても、口語は現代的状況を表層にまとっているために、言語主体は、個別的現象にすぎない自らの言語表出にたいして歴史的社会的普遍性をもつかのような錯角におちいりやすい。

この文章はいったい何を言うとしているのか。今、書写という作業を試してみても内容はぼんやりとしか理解出来ない。何か生半可な哲学青年の生硬な文章を読んでいるようで、熟れないものかどうしても残る。しかも引例は特別に気になる部分を書き抜いたのではない。このような文体が続いたのでは、全文通読しろとい

う方が無理というものである。

近代の批評文が、難解を銜うことで一種の權威を持っていたことも、馬鹿らしいが事実である。そして読者の側でも理解しずらければしずらいほど、有り難く思う傾向がいまでも少々残っている。しかしこれはお粗末な話である。文章を活字化して世に問うのは読者あつての行為であり、書き手は読者に様々な人間がいることを深く注意しなければならぬ。

文体の問題とも関連することで、著者の誠実さが負の作用をしているように思える場合があるのは非常に残念である。著者はこれまで朔太郎研究者の意見を参考にし、それらを正確に引例して論を進めている。これは研究者として当然の態度である。しかし細かい用語に至るまで、いちいちへへによって区別して文章を作成する必要があるであろうか。あまりに引例を正確にしようとして、どこまでが先行者の意見で、どこからが著者の意見なのか理解しづらくなった個所もある。もっと自由に自己の意見を展開するような論理構成にしてもよいのではなからうか。

上記の点は、全体の論旨の展開についても言える。著者はこれだけ朔太郎の作品を考察したのであるから、それぞれの詩集のもつ魅力と欠点を著者自身の言葉で明言するべきである。たとえば『氷島』を囲む好悪の評価にしても、著者は両者の意見に十分な理解を示す。しかし著者自身が朔太郎の業績の中でこの詩集をどのように位置付けているのかといった肝腎な見解は述べられず、当り障りのない結論になってしまっている。これなども、核心を

明確に述べるべきである。

著者の真摯な姿勢がわかればわかるほど、文体と執筆態度の問題は再考していただきたい。また文章も読者に理解しやすくなるように推敲をしていただきたい。

「跋文」によれば、本書は著者の属していた学界の雑誌等へ発表した論文を、「むしろ書きなおしも同然になった」ほど斧鉞を加えて、一書にしたことである。この点は、近年の研究書なるものが、しばしば何の脈絡のない論文を集めて一書にしたものでありながら、あたかも統一した書物のごとき書名によって読者を欺いたり、時によると内容が重複する論文をかまわずに収めているような場合合する見られるに比べて、本書には単発論文の寄

せ集めといった安易さは何処にもなく、テーマも統一され、朔太郎の詩の全体像を解明しようとする熱意に充ちている。また詩を観察するに際しても、全集の草稿詩篇にまで十分目を配っている。これなどは著者の研究態度が、いかに真面目であるか語っている。全体を通読して感じられることは、何によりも著者の朔太郎の詩作品に対する観察が若々しい純粹な情熱によって支えられていることと、新しい研究方法を開拓しようとする意気込みである。加えて、著者の朔太郎の作品を研究する根本に対象となる作品への深い共感が見られるが、そのことは何より好感を与える。

(昭和五十六年十一月、桜楓社刊。定価四八〇〇円)

(さとう・ふきよし 中京大学教授)